

「日本人へ」二五〇回記念（承前）

『翔ぶが如く』 を読む

しおの ななみ
塩野七生

作家・在イタリア

西郷と決別する大久保が
引き受けた「苦しみ」



『竜馬がゆく』は、人好きがして明るい坂本竜馬が主人公。脱藩は今ならば脱サラだから、自由な身分ゆえのカッコヨさも充分。「労」ならば多かったけれど、若い時期の労は「苦」にはならない。つまりこの作品は若者向きなのだ。

一方、西郷隆盛と大久保利通が二大主人公になる『翔ぶが如く』になると、オトナ向きの作品に変わる。西郷は竜馬より八歳年上で大久保は五歳年長というほとんど同世代に属す三人のだが、作品全体の印象はちがってくる。アイデアは豊富でも権力は持っていないかった竜馬に比べて、後の二人は権力者になっていたからだ。

権力とは、それが人望であろうと政府内の地位であろうと変わりなく、他人、つまり第

三者の将来を決める「力」を持つということである。要するに、責任ある立場になったということ。ゆえにその責任を自覚している権力者ならば、「労」に加えて「苦」も味わわざるをえなくなる。西郷と大久保を苦しめることになるこの「苦」は、廃藩置県の断行から始まったのだ。

このときの西郷の説得役に、親友の仲の大久保でもなく長州側のリーダーである木戸孝允でもなく、三三歳と若い山県有朋が送られたのは冷徹な打算があった。

公武合体策で行くとした場合、日本の防衛を担当する兵力は諸藩からの（まだ残っているのだから）持ち寄りになる。つまり一種の多国籍軍で、関ヶ原のときのような事前の周到な根まわしは不可欠。それを避けたければ、命令系統の一本化のためにも国軍にするしかない。いまだ若い山県有朋は大先輩の西郷への説得を、軍制面にしぼったのである。軍制改革の経験からもこのまま諸藩を温存しては国政は行えない以上、廃藩置県に着手すべきではないか、と。

これに西郷は即座に応じる。「まことにそうじゃ、それはよろしかろう」。三三歳の長州人と四四歳の薩摩人は、それだけでわかり合えたのである。西郷には、薩長土肥の連合軍を率いて戊辰戦争を闘った経験があったし、山県には、「土」だけでなく農・工・商までも指揮して闘った奇兵隊の経験があった。

軍事制度自体には、イデオロギーは関与しない。持てる力をどれだけ効率よく活用できるか、のみを考えて作成する制度なのだから。その必要性に鋭く反応した西郷が加わったことで、廃藩置県は現実化できたのであった。

ところがこの直後に、岩倉具視が主席で大久保と木戸が副使の使節団が欧米諸国に向けて発つ。留守政府の責任者は西郷隆盛。ここから西郷の「苦しみ」が始まるのだ。廃藩置県が敢行されたおかげで、一年ちょっとでケリがついたとはいえ戊辰戦争の勝者ではあったサムライたちが、一挙に失業者になってしまったからである。それを見過ごすことができなくなった西郷が考えたのが、失業者になってしまった彼らに生きる道を見つけてやることであった。それが征韓論の始まり。

これに真っ向から反対したのが大久保利通である。岩倉も木戸も反対。当時の先進国であるイギリスやフランスやドイツを見てきた全員が反対側にまわったのは、他国に攻めに行くような余力は日本にはまだない、という理由だった。失業者の救済は他の方法で解決すべきことで、彼らを率いて他国に攻め入ることではない、と。

面目をつぶされた、というよりも、苦しみを解決する方策を拒否された西郷は下野する。政府の重要な地位をきっぱりと捨てての下野だから、カッコイイとだけ見ているは西郷の「苦」に肉迫できない。文庫で全一〇巻におよぶ『翔ぶが如く』の三巻目で、この二人は最後に面と向う。この場面は、伊藤博文という現場証人がいる以上は史実だから学者たちも全員とりあげるが、司馬遼太郎が描くとなると秀逸の一語。その場にわれわれもいるような想いにさせてくれる。

へ二十三日、夜があけると、西郷は東京をひきはらうべく行動しはじめた。／(略)この間、手まどったのは西郷は行動を秘密にしながらもただひとりの人物に暇乞いするためであった。／ただひとりの人物とは、桐野少将でも篠原少将でもなかった。／大久保利通で

ある。／もし桐野ら西郷の親昵者がこれを知ればあるいは信じないかもしれない。西郷は東京退去を桐野にもうちあげず、大久保にのみうちあげ、大久保にのみ暇乞いした。西郷は結局、自分をもっともよく知る者は大久保であると思っていたし、たとえこの期になつて政見が相違し激しく抗争したにせよ、西郷が畏敬できる男は桐野ら西郷派が憎悪している大久保しかいなかったということは、西郷の人間関係の風景として痛烈ななにかを物語っている。

大久保は西郷の突如の来訪に、ややおどろいたらしい。／西郷は大久保の座敷にだけは遠慮がなく、そのままあがった。／座敷に先客がいて、小柄な男だった。西郷が入ってきたことでよほどおどろいたらしく、風に散るような素早さでずっと下座にさがった。長州人伊藤博文である。(略)／「拙者は、はずしましうか」／と、伊藤はいったが、西郷はかまいません、と伊藤に会釈し、大久保と相対した。

西郷はしばらくだまってすわっていた。こういう場合の沈黙に耐えるのは薩摩人の特徴であるが、その点においては大久保のほうがむしろ深刻な耐久力があるといえる。大久保は背筋をのびしたまま黙っている。／ほどなく茶菓がはこばれてきた。／菓子には、カステラであった。(略)

西郷は一切れを二口ほどで食い、煎茶のみ、やがて、／「一歳どん、俺はくにご帰っど」／ぼそりといった。／「辞表を送っておき申した」／それに対し、大久保はむっとしたらしく、蒼白といていい顔にめずらしく血がのぼった。

(一歳めは、怒っている)／と、西郷はすぐ察し、そのあと、双方だけがわかる無言の

対話があった。「また仕事の仕くさしで帰るのか」というふうな抗議が大久保の表情に出、それに対し西郷のほうは「怒らんでもよか」というふうにならずかながら微笑でむくいている。

「今後の国事は、よろしゅう頼みやげ申す」と、西郷がいうと、大久保はたれにもみせたことのない無遠慮な怒気をみせ、

「それは吉之助どん、俺の知った事か。いっでんこいじゃ(いつでもこうじゃ)。いまはちゆう大事なお前さア、逃げなざる。後始末は俺せならん。もう、知った事か」と、いった。

西郷も、これには閉口したらしく、しばらく太い眉を垂れるようにしてうつむいていたが、やがて、／「仕様がな」と、つぶやき、立ちあがった。大久保はよほど腹が立っていたらしく、玄関まで見送るといふことさえしなかった。両人は幼いころからの間柄だけにそこに他人の容喙すべからざる呼吸があるようだったが、終始この光景をみていた伊藤博文がさすがに見かね、あとで、／「さきほどのお言葉、あれではちょっとひどすぎるように思いましたが」というと、大久保も目のふちに隈を黒ずませ、先刻とは別人のような疲れを見せて、／「私もそう思います」と、小声でいった。

この日、両者は永遠に別れることになった。

ちなみにこの時期、西郷は四六歳、大久保は四三歳、いまだチヨコマカ時代の伊藤博文は三二歳。何もやらなければ失敗もしないのだし、テロの犠牲にもならないと思っている政治家たちとは同一視しないでもらいたい。「苦」は、つまり責任の重さを自覚すること

は、人間を成熟させる第一の要因になるのだから。

とはいえ私的な感想は別にして決別後の二人の「苦しみ」を追えば、次のようになる。

一八七三年、こうして下野した西郷、薩摩に帰ってウサギ狩りの日々に。

しかし翌年、同時に下野した一人の江藤新平が率いる佐賀の乱、勃発。世に言う不平士族の乱の第一陣。これには応じなかった西郷だが、それでも薩州の中に、旧士族の教育を目標にかかげた「私学校」は開設する。

このときの西郷は私にはわからない。士農工商の差の撤廃を目指したはずの廃藩置県を敢行しておきながら、一転して「士」の再興に熱心になったということなのだから。長州人の木戸孝允が口をきわめて非難したのも当然だ。だが薩州人である大久保にとってのこの「苦」は、論理的に批判して済む問題ではなかったのだろう。その年の彼はひどく忙しい。自ら軍を率いて佐賀の乱を鎮圧してすぐ、対外国との交渉の前面に立つのだから。

この試練を、外交官になったこともない四〇代半ばの大久保がどう乗りこえたか。それは『翔ぶが如く』の第五巻の前半すべてを使って物語られるのだが、司馬先生によるこの部分の描写はとくに出色の出来。戦争は血を流す政治であり外交は血を流さない戦争、と私は思っているが、外交官試験に合格して研修所入りした現代のヒョッコ外交官たちには、ぜひ読んでほしい。アンタたちを待っているほんとうの仕事は、他国の同輩たちと杯を交わすことではなく、血を流さない戦争をすることなのだ、とわかってもらおうためにも。

交渉が失敗に終わった場合は戦端を開く権利までふくめた文字どおりの全権を与えられて清国に向った大久保だが、その内実は相当に無理押し之感が強かった。これまた失業した旧士族対策ではあったのだが、西郷隆盛の弟の従道が率いて台湾まで行った日本軍が諸々の事情で帰るに帰れなくなっていたことの後始末であったからだ。とはいえ、この日本兵たちの帰還も、日本の面目の立つやり方で実現しなくてはならない。もともとからして「無理」なことを、国際法上での「理」を探し出すことで清国との和平に持っていかねばならないのだから、相当な「芸」が必要になる。これまで清国との外交を担当していた、公家の柳原前光などにはできることではなかった。

「無理」の中に「理」を見出していく知力と、二カ月もの間、一貫してブレなかった胆力のみ。このときの大久保にとっての最良の協力者は、日本人ではなくてフランス人のボアソナード。このお雇い外国人の国際法の知見と大久保自身のけっこう当意即妙に發揮された漢語の知識で、当時の日本人が大国と思いきんでいた清国との和議は成功したのだった。しかも清国側から賠償金まで出させているのだから、日本側は面目プラス・アルファで妥結できたことになる。

しかもこのちょっと後の話になるが、それも大久保が、煮ても焼いても食えない男であったことを示すエピソードになる。

二カ月にもわたった清国との緊張をゆるめる暇もなかった長い交渉は、結局は清国駐在英國公使のウェードが乗り出してくれたことで妥結できたのだが、もちろん英国は、それをタダでしたとは思わない。日本での新しい港の開港とか、その地での英国民専用の居留

区設置とかの「仲介代」は期待していた。ところが、英国の外交官たちよりも大久保のほうが役者が上であったのだ。

ウェードから引き継いだ駐日公使パークスは、本国政府に報告している。「大久保は漆器など持ってお礼には来たが、早々に帰ってしまい、当方には何も言う暇さえ与えなかった」と。「仲介代」まで、タダでやらせちゃったわけ。居留区開設が植民地帝国主義の第一歩であることを、大久保はわかっていただけかと思ってしまう。

『竜馬がゆく』でも『坂の上の雲』でも全八巻なのに、『翔ぶが如く』だけは全一〇巻になる。人望であろうが政府内の地位であろうが権力、つまり他者の将来まで左右する力、を持ってしまった男たちの「苦」までを描いたからであろうか。そのうえ文春文庫の司馬作品の発行部数ベストは、一位は『竜馬がゆく』で二位が『坂の上の雲』であることはわかるが、『翔ぶが如く』は三位にしている。内容は苦しいのにつこう売れているのは感心したが、人気ナンバーワンの西郷隆盛が主人公であるためか。たしかに、日向に向うのを断念し故郷に帰って死にたい一心でリターンに転ずる西郷とそれに従っていく最後のサムライたちは哀切そのものである。しかし、大阪で総元締めに徹していた大久保から、戦場において国軍の総指揮をとる山県、また各隊の指揮官クラスまで、彼らは西郷につきかず国軍側で闘っている人々なのだが、その全員に何となく、西郷を故郷に帰らせてそこで死なせたい、という感じがうかがわれるのも哀切。敗者の美学と人は言うが、勝者にも美学はあるのだ。いずれの側も、人間ということでは変わりはないのだから。多分テレビ

二〇二一年一月六日に突如起きた前代未聞の「連邦議会襲撃事件」。トランプ氏の大統領選敗北を認めない支持者が議事堂を占拠し、警官ら五人が死亡。一〇〇〇人以上が訴追され、トランプ氏自身もワシントン連邦地裁に起訴された。「あり得ないことが起きた！」と世界を震撼させたこの事件を半ば「予言」していた政治学者がいる。カリフォルニア大学サ

ンディエゴ校・政治学教授のバーバラ・ウォルター氏だ。戦略学者の奥山真司氏が「予言的中」の理由と今秋の米大統領選について尋ねた。

——「アメリカは内戦に向かうのか」という衝撃的なタイトルのご著書は、日本語版（井坂康志訳、東洋経済新報社）も出ていますが、なぜこの本を書かれたのですか。

ウォルター 実は、「米国の内戦」に関する本を書くことになるのは、自分でも思いもよりませんでした。私は政治学者として世界中の「政治的暴力」を研究してきました。一九九〇年からは「内戦」を研究しています。二〇一七年から二〇二一年にはCIAの「政治的不安定性タスクフォース」のメンバーに加わりました。どの国が政情不安や政治的暴力に見舞われる可能性が高いかを

連邦議会を占拠するトランプ支持者



米国で南北戦争が再び起こる日



「九は内戦に向かうのか」
トランプの大統領選敗北は二度目の南北戦争を招くのか

ウォルター氏の著書

カリフォルニア大学サンディエゴ校教授
バーバラ・ウォルター
連邦議会を襲撃したのは高学歴の裕福な白人だった

聞き手 奥山真司 戦略学者

での話をまとめたものと思うが、最後にNHKブックスの『「明治」という国家』の中から司馬遼太郎の大久保評を書き写す。

（かれ（大久保利通）は、才能、気力、器量、そして無私と奉公の精神において同時代の政治家からぬきんでていました。

私は、こんにちに至るまでの日本の制度の基礎は、明治元年から明治十年までにできあがったと思っていますが、それをつくった人間たちについて、それをただ一人の名で、代表せよといわれれば、大久保の名をあげます。沈着、剛毅、寡黙で一言のむだ口もたたかず、自己と国家を同一化し、四六時ちゅう国家建設のことを考え、他に雑念というものがありませんでした。

大久保は宰相でもなんでもなく、政府の一つの部分を受けもつにすぎませんでした。が、ひとびとが大久保を重んじて案件のほとんどをかれのもとに持ちこむか、かれの承諾をえるか、いずれかでありましたので、かれは事実上の宰相でした。それ以上でした。

しかし大久保利通には、それをつづける時間は与えられなかった。木戸が病死し西郷も死んだわずか八カ月後の一八七八年、テロに倒れたからである。そして世論は、大久保ではなく、無知で卑怯者で目立ちたがり屋にすぎないテロリストたちのほうに同情した。右の司馬先生の言葉くらい、大久保利通にふさわしい墓碑はないと私には思える。

（六月十一日記）